

1. 教育の責任

国際看護学部の教育理念である多様性への理解と受容及び看護の実践力を有する人材育成の基盤となる職責を担っています。

2. 教育の理念

新しい命を育み家族を形成していく周産期にある母と児の身体的・心理的・社会的特性をふまえ、そのウェルネスの維持・増進のために必要な看護の知識・技術・態度を教授する。

女性とその家族に関わる看護援助を、エビデンスに基づいて教授する。

教育活動の全過程を通じて学生を尊重し、エンパワーする。

3. 教育の方法

【4年間を通じた教育】

2年次「母性健康看護学概論」「多様性とウイメンズヘルス」では、人間のセクシュアリティの身体的、心理・社会的、国際的な特徴を教授し、3年次の「母性看護援助論Ⅰ・Ⅱ」で、妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期の看護実践技術を教授したうえで、3年次「母性看護学実習」、4年次「統合看護学実習（母性）」で実際の対象への看護展開ができるよう、教授／学習活動を積み重ねています。

学習の積み重ねに困難を生じる学生には、2年次からオフィスアワーを活用してチュートリアルを実施し、個別対応をしています。毎年、この制度を10～20人程度の学生が利用しています。制度を利用しない学生に対しても、この制度があることを知ってもらうことで、質問や相談がしやすい環境・関係を作り意図しています。

他に「医療関係法規」の科目責任者として、看護および母子に関する法律の教授を担当しているほか、「看護研究Ⅱ」でも科目責任者として学部全体の卒業研究の進捗状況を把握し、学部内の教育内容の統合を図れるようにしています。卒業論文指導は4～5名を対象に年間を通じて行い、学生の研究の問いを文献レビューを通じて深め、研究実践は看護の対象のみならず自身の内面にある複雑性にとっても価値あるものであることが実感できるよう、指導に当たり、全員が生き生きとゼミに参加し卒業論文を完成しています。

【講義・演習・実習を通じた教材開発】

講義は、単元に応じた最新の政府統計や国際機関刊行物、学術論文から引用した資料を活用し、学生の知的好奇心を喚起しつつ、母性看護学の最新動向を踏まえています。演習では、周産期（妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期）のウェルネスに焦点をあてた看護実践能力を、教示と繰り返しの練習などを通じて自然と楽しんで身につくようにしています。

英語教材は政府資料及びオリジナルの資料を併用し、母性看護を必要とする多様な対象への日本語と英語を併用したコミュニケーションに対し動機づけを行っています。「母性看護援助論Ⅰ」では、学生が2年次に促してきたノートイクを発展させ、領域教員と協働してノート型教材を作成しました。さらに学生が少子社会に在っても地域母子保健の役割や実際を授業・演習・実習を通じて学修できるよう、授業内で育児中の女性にも体験を語ってもらい、新カリキュラム下で新設された「地域連携継続演習Ⅱ」では、実習で出会った外国籍の母の事例について深められるようにするなど、育児に関連する経験の少ない現代の看護学生に有効な母性看護の教授法を模索して実践しています。

【国際看護学部独自の母性看護学教育】

「統合看護学実習（母性）」ではシンガポールのナンヤンポリテクニク（NYP）の学生と、国際看護学部生とが合同で、地域における育児期の女性を対象にした小集団への健康教育を準菱、それぞれ実施しました。NYPの学生は英語、本学部の学生は日本語で、ともに「母乳育児後の乳がん検診の重要性」をテーマにしています。それぞれ、実習期間中に地域の助産所で実施し、実施後には対象から自記式アンケートで直接評価を得ています。英語・日本語併用での指導やディスカッションは各国の学生にとって刺激となり、各国の疾病統計や検査体制の違いなどを意識するきっかけになっていました。対象からの評価はいずれも高く、臨床指導者からも高評価でした。

【母性看護学領域以外の教育】

学部長として、全学生やその家族等への丁寧でタイムリーな対応や、教職員とのコミュニケーションのもとに学部方針の的確な策定や実施に努め、それにより学部全体の教育力が最大化するように活動しています。国際学術協定校との関係強化や MOU の延長、新規締結など、国際看護学部での看護教育をより豊かに実施できる環境整備を不断に行っています。

大学院国際看護学研究科では、研究科目群の中で日本の看護学教育の中で遅れがちでありながら国際性にとって必須であるジェンダーやセクシュアリティに関する科目の教授を担当しています。

4. 教育の成果

個別指導の成果として、講義終了時の中間・定期テストは平均 70 点以上となっています。学生のリアクションシートの内容、チュートリアルで個別の学習ニーズに応え学生群からは 1 名も科目離脱をしていないこと、講義・演習内での学生の発表は活発で欠席率も低いことから、学習満足度は総じて高いと受け止めています。実習についても、実習指導者合同協議会などを通じ、実習指導者からの評価も良好な状況です。国家試験対策で対策講義などを実施した後、学生の模試結果も順調に伸びています。

5. 改善への努力と今後の目標

授業内容が過密で入力時間が十分確保できないこと、授業アンケートの回答率が依然として低く改善が見られないことから、次年度は、AI 学習などを導入して授業時間内での入力を促す方針です。

母性看護学領域長として、若手教員の育成や能力開発支援をこれまでも行ってきたが、その成果として、2025 年度は領域助教による演習科目の授業開発を達成できました。自身の科研（2025～2028 年度まで）パイアウト制度を導入予定で、次年度から、実践家教員を非常勤講師に迎え、より実践的な母性看護学教育を実施しつつ、自身の研究エフォートを上げて研究成果としてのエビデンスを講義で活用する好循環を確実に回していきたいと考えています。

【添付資料】

- ①シラバス「母性健康看護学概論」「多様性とウィメンズヘルス」「母性看護援助論Ⅰ」「母性看護援助論Ⅱ」「母性看護学実習」「看護研究Ⅱ」「看護学研究方法特論」「ジェンダー学特講」「セクシュアリティ看護特論」
 - ②開発教材（「統合看護学実習Ⅱ」成果物抜粋）
 - ③学生アンケート
- 資料として②のみ下記に一部抜粋。

